感性・思考・表現を大切にした国際理解教育

『世界に目を向けよう』

ーブルキナファソとの二年間の文通・交流を通してー

大阪府寝屋川市立梅が丘小学校　百﨑正俊　谷千春

目　　次

1. はじめに

2. 国際理解教育の構想
(1)国際理解教育のねらい
(2)表現活動の重要性
(3)ゲストティーチャーの持つ意味

3. 実践と子どもの変容(ブルキナファソとの二年間の交流から)
(1) 岡野さん(青年海外協力隊員)との出会い、メール・写真・ビデオによる交流
(2) 音楽(西アフリカの太鼓ジェンベ)や図工による表現活動の取り組み
(3) ブルキナファソの子ども達の劇「ボンヌ(家政婦)」を見ての話し合いと劇づくり
(4) ラゾさん(在日ブルキナファソ人)との出会い
① 人の思いに触れる・ラゾさんから聞いた人種差別や偏見の話
② 「道徳」の授業から(表現活動を通して見えてきたラゾさんの悲しみ)
(5) プレゼンテーション作りを通して

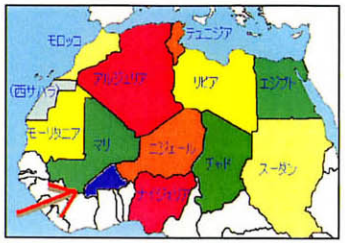
4. 学習の足跡

5. 実践から学んだもの(感性・思考・表現の“一体化”)

6. おわりに

1. はじめに

「ブルキナファソ？そんな国があるの？」。ブルキナファソと聞いて、ほとんどの人がそう答える。西アフリカのサハラ砂漠の南に位置するブルキナファソは、世界の中でも最貧国の一つである(**資料1**)。文通しているゴアンガン小学校(村)・ナバワクセ小学校には、電気も水道もガスも通っていない。日本の子ども達からは想像もつかない生活を送っている。



資料1 ブルキナファソ

これまで、H12～15年度の四年間、百﨑・谷で5・6年を二回続けて担任し、総合的な学習で『世界に目を向けよう』の国際理解教育に取り組んできた。

一年目(5年)は『音楽から世界へ目を向けよう』で、アフリカの太鼓、ブラジルのサンバ、アメリカのゴスペル、中国の太鼓、日本のソーランをきっかけとしながら、それぞれの文化の持つ“よさ”や“豊かさ”を感じていった。二年目(6年)は、コラージュ制作からみえてきた世界の問題から「地雷・貧困・核」にテーマを絞り、プレゼンテーションに劇づくりを取り入れるなど、“表現活動”を大切にしながら学習を進めてきた。そこでは、子ども達が、単なる〈頭〉の理解ではなく、“感性”を働かせながら“思考”を深めていく姿があった。

ブルキナファソとの交流は、子ども達の中から、「実際に貧困にあえぐ国の子ども達と文通したい」との声があがり、文通が始まった。そこで、実際にブルキナファソの小学校と交流していくにあたり、貧困の問題、しかし、その中でもたくましく生きている人々の姿を、〈頭〉でなく〈心〉で捉え、考えていくために、子どもの“感性”に訴えかけ、“表現活動”を大切にした国際理解教育を進めていくことにした。

今回報告する実践は、三～四年目(5・6年)に、子ども達が、「ブルキナファソの学校との文通・交流を、先輩から引き継いで自分達も是非やりたい」との思いから始まった取り組みである。

2. 国際理解教育の構想

(1)国際理解教育のねらい

国際理解教育の目的やねらいを次の3点と考えている。

①今まで知らなかった世界の人々のくらしに目を向け、世界が抱える問題を考える中で、国際理解や国際協力、世界の中での日本の役割について考える。⇒「外国」について考えること＝「自分の国」「自分自身」について考えるということ
②自国の物差しや価値観を基準にして考えるのではなく、それぞれの国の習慣や価値観を尊重しながら“共生”“共存”することの大切さや「グローバルな国際感覚」を養う。
③世界には様々な文化や習慣が存在することを知り、それぞれの文化の“よさ”や“豊かさ”を認めようとする「感性」を育てる。

それぞれの国や地域、民族にはそれぞれの文化や習慣がある。そこには,“差”でなく、“違い”があり、そこには“よさ”や“豊かさ”がある。「国際理解」とは、「異質」なものに対する“自分の見方”や“価値観”を捉えなおすことであり、外国(他者)を理解するだけでなく、自国(自己)を振り返り、理解する事でもあると考えている。

(2)表現活動の重要性

子どもは“頭”だけでなく、“五感”を通して物事を感じ、考えていく。その際、音楽・劇・ダンス・絵といった表現活動や創作活動が、子どもの殻を破り、“五感”を刺激し、主体的に取り組む力を生み出し、学習に躍動感を与えていく。「表現」とは、単なる“発表”ではなく、自分で体験し、考え、新たにその〈意味〉や〈価値〉を発見する“過程”そのものである。

とかく、国際理解教育は子ども達にとって〈遠い外国〉のお話や出来事になりがちになる。それを〈身近〉な存在として捉え、頭だけの“理解”ではなく、グローバルな“感覚”“感性”を子どもの中に培うために、表現活動を大切にして学習を進めてきた。そして、このことは子ども達に「生きる力」をつけることにもつながってくると考えている。

(3)ゲストティーチャーの持つ意味

子どもに「グローバルな国際感覚」をつけるためには、その事を感じ、考えるための情報が必要となってくる。しかし、現在、様々なメディアやインターネットで簡単に入手できる情報を知ることが、即“国際理解”にはつながらない。情報を、漠然とした外国の“出来事”“お話”としてみるのでなく、できるだけ具体的な“人”や“生き方”など人間の息遣いや鼓動、身体のぬくもりが、子どもの心のフィルターを通ってこそ、その情報が真の「情報」となり、血の通った「理解」へとつながってくる。そういった意味で、子どもが、ゲストティーチャーの“人”や“生き方”の部分を感じ取れることが重要になってくる。今回の学習でも、岡野さん、ラゾさんなどの“人”との出会いがとても大きな意味を持つこととなった。

3. 実践と子どもの変容(ブルキナファソとの二年間の交流から)

(1)岡野さん(青年海外協力隊員)との出会い、メール・写真・ビデオによる交流

今回の学習では、現地で青年海外協力隊員として活躍されている岡野貴誠さんに協力していただいた。岡野さんとは100通以上のメールを通して打ち合わせや情報交換をし、手紙のフランス語への翻訳もして頂きながら、ブルキナファソとの文通を進めていった(写真1)。

写真1 ブルキナファソの話をする岡野さん

岡野さんが子ども達に送ってくれた写真やビデオには、教科書やノート・文具類がほとんどない中で、一生懸命勉強している子ども達や「働く子ども」の姿があった(写真2・3)。特に、幼い子どもが、子守り・水くみ・炊事・牛追いなど、たくさんの家の仕事を手伝ったり、学校にも行けず、物売り・店番・水売り・自転車の空気入れなどで働いている様子に、子ども達は、豊かで恵まれた自分達の国日本とのギャップにショックを受けていた。

写真2 裸足で学校へ通う子

写真3 水売りをする子

様々なメディアやインターネットで簡単に入手できる一般のメディアでは到底見られない岡野さんの“目”を通したリアルで臨場感あふれる写真や映像から、子ども達はブルキナファソの“現実”について深く考えていった。そして、資料2のように日本との違いに驚く子(C1)、相手の子どもに寄り添う子(C2)、ブルキナファソの子を「すごい」と捉える子(C3)、日本の子ども(自分達)のくらしを振り返る子(C4・5)等、岡野さんの写真という“表現(物)”から感性を働かせ、思考していく子どもの姿があった。

資料2　授業記録「岡野さんからの写真《ブルキナファソの働く子どもたち》を見て」

T:岡野さんから送られてきた写真を見て、思ったことを発表してください。

C1 ブルキナファソの子どもは、家庭が苦しくなって働いたり売ったりするのが当たり前になってて、日本とは違う。自分の予想よりも違っていてびっくりした。

C2 日本では子どもは店のこととかやってないし、好きなことをやっている。ブルキナファソでは本当は遊びたいのに、働いていてどんな気持ちなんだろう。

C3 日本の子は、お母さんの手伝いをしたり買い物したりが「手伝い」だけど、ブルキナファソの「手伝い」は「働く」ということになっている。日本はちょっとした手伝いだけど、ブルキナファソではお金を稼ぐ手伝いで、子守りとか売るとかやってすごいな。

C4 日本の子どもは自由気まま。ブルキナファソの子は貧しいから働いていて、貧しさのせいで自由を奪われているのに。

C5 僕らは(自分が)「働きたい」と言うけど、ブルキナファソは働かないと生きていけない。日本の子はよく「学校に行きたくない」と言うけど、ブルキナファソの子はすごく「学校に行きたい」と思っているんじゃないかな。

(2)音楽(西アフリカの太鼓ジェンベ)や図工による表現活動の取り組み

次に、子ども達は、これまでの文通やメール・岡野さんが写してくれた写真から感じたこと、伝えたいことをもとに、ジェンベの演奏や絵画の共同制作(写真4・5)で表現していった。ここで

写真4 体育館の壁面いっぱいの共同制作

写真5 ジェンベと働く子ども達

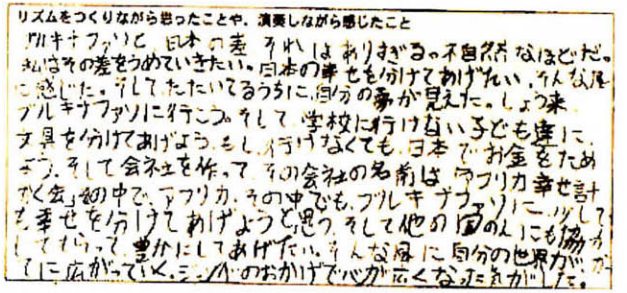
は、紙面の都合で音楽に絞って述べることとする。

ジェンベは、面がヤギの皮で、胴体が木で出来た西アフリカの太鼓である。身体全体を使って打つことによって、音色の魅力もさることながら、“アフリカの生命”そのものが演奏する子ども達の心に直接響いてくる。そこで、『ブルキナファソとの交流の中で一番心に残ったことをジェンベの演奏で表現しよう』というジェンベを使った音楽づくりに挑戦することにした。子ども達は、ソロまたは2～3人のアンサンブルに分かれて、自分の表現したいテーマを見つけ、リズムや構成を考えながら自由にオリジナルの音楽を創作していった(資料3、写真6)。

写真6 国立民族学博物館で披露したジェンベの演奏

資料3	子ども達の創作した曲のタイトル
1『働く子どもを助けたい』	2『毎日毎日がんばっている子ども達』
3『重い水を運ぶ子ども達』	4『生きるためにがんばっている子ども達』
5『市場で働く子ども達』	6『一生懸命水くみ水売りしている子』
7『砂漠で生きる家族』	8『日本とブルキナファソのトイレのちがい』

文通を始めてから「日本とブルキナファソとの差をうめたい」と考えていたTさんがジェンベの演奏を通しながら、「たたいているうちに自分の夢が見えた」「アフリカ幸せ計かく会を作ろう」と自分の将来の夢を育み、「そんな風に自分の世界がかってに広がっていく」「ジェンベのおかげで心が広くなった」と感じるようになってきた。まさに、頭だけでの“理解”だけでは生まれてこない、Tさんらしさ、Tさんという〈個〉の思考の広がりがみえてきた(資料4)。



リズムをつくりながら思ったことや、演奏しながら感じたこと

ブルキナファソと日本の差それはありすぎる。不自然なほどだ。私はその差をうめていきたい。日本の幸せを分けてあげたい。そんなふうに感じた。そしてたたいているうちに自分の夢が見えた。しょう来ブルキナファソに行こう。そして学校に行けない子ども達に文房具を分けてあげよう。もし行けなくても日本でお金をためよう。そして会社を作って、その会社の名前は「アフリカ幸せ計かく会」。その中で、アフリカ、その中でも、ブルキナファソに少しでも幸せを分けてあげようと思う。そして他の国のんにも協力してもらって豊かにしてあげたい。そんな風に自分の世界がかってに広がっていく。ジェンベのおかげで心が広くなったきがした。

資料4 Tさんのノート

(3)ブルキナファソの子ども達の劇「ボンヌ(家政婦)」を見ての話し合いと劇づくり

ブルキナファソのナバワクセ小学校から子ども達による「ボンヌ」の劇のビデオが送られてきた。

ナバワクセ小学校は演劇活動の盛んな学校で、実は、この劇はブルキナファソの小学校コンクールで優勝し、つい最近スイスまで公演にいったものであった。その表現力はとても小学生の子どもとは思えないほど素晴らしく、すごい迫力であった(写真7)。

「ボンヌ」とは、家政婦として働く女の子のことである。

写真7 ボンヌの劇での迫真の演技

ボンヌとして働くことになる事情は様々あるが、家が貧しく、学校にも行けず、満足な食事もできないため、親戚の家などに預けられ、食事つきで働くことが多い。知り合いを頼んだりして《つて》を探すことも多く、アフリカの大家族制の生み出した「互助の形」と言えなくもない。しかし、このようなボンヌとその家の子ども達や雇い主との間で“問題”が起きることは多く、様々な虐待などの問題も起きている。ボンヌの劇を見て、その問題について深く考えていくことにした。

資料5　授業記録「ボンヌの劇を見て思ったこと」

T1：ボンヌの劇を観て、みんなどんなことを思ったり考えたりしましたか？
C1：“子どもの虐待”がアフリカにあるとは思わなかった。こんなことがたくさんあるとしたら悲しいな。
C2：子どもが働くのはいいとは言えないけれど、預かって協力するのはいい関係だと思う。
C3：日本だって、親が自分の子どものことしか考えていないってことがあるから、一緒じゃないかな？映画の『ほたるの墓』で観たけど、昔の日本でもブルキナのように親戚の子供を預かってたよ。
C4：でも、あんまり仕事を押し付けすぎやで。言葉ではそう言えても、もし自分がその立場なら、本当に我慢して働けるんですか？！
（中略）
C5：私は、初めボンヌはいいと思ってたけど、学校にいけない子がほとんどとわかって、未来もないし自由もない。どう考えていいのか、ゆれています。
C6：私も迷っています。ボンヌはない方がいい。でも、ないと生きていけない。
C7：日本は何かぜいたくみたい。学校にも当たり前に行けるし、「あれ、買って！」とわがままも言える。豊かな国がちょっと我慢すれば、他の貧しい国は楽になるのに・・・。
C8：人の生活にとって、必要なものって何やろなあ？幸せなくらしに本当に必要なものって何なんやろう・・・？

ボンヌの話し合いでは、当初、資料5の、ボンヌをC1，C4のように「よくない」と捉えていた子どもとC2，C3のように「いい関係」と考えた子に分かれた。そこで、単なる感想の交流や〈他人事〉の話でなく、〈自分の立場・視点〉をはっきりさせながら話し合いを進めていった。また、同年代の子どもが演じる迫真の演技は、見ている子ども達の感性に訴え、思考を深める原動力となった。その中で、子ども達は、この劇の中に内包されている社会の“矛盾”に目を向けていった。

思考が深まり、矛盾に気づく中で、C5，C6のように子ども達は簡単に答えを出せなくなった。そして、C7の今の日本の自分達のくらしを振り返る子やC8の自分の価値観を問い直すような発言も出てきた。日本人の“価値観”だけで測れない部分や、それぞれの長い歴史の中で生まれてきた「仕組み」や「制度」の“意味”などを考えさせられ、まさに、「他国理解」が「自国(自分)理解」につながっていく話し合いとなった。そして、そのことをプレゼンテーションの劇の脚本としていった。

(4)ラゾさん(在日ブルキナファソ人)との出会い

学習を進めていく中で、「実際にブルキナファソ人の方に来てもらってボンヌの話やアフリカのことを聞きたい」ということになった。岡野さんの知り合いで東京在住のラゾさんに、梅が丘小学校に4日間ゲストティーチャーとして来て頂き、子ども達と一緒に過ごしてもらうことにした。

実際に、水汲み体験（写真8）や、ブルキナファソ料理作りをしたり、イスラム教のお祈り（写真9）やアフリカンダンスを教えてもらったり、また、ボンヌのことや厳しいブルキナファソの学校の様子、両親のいないラゾさん自身が働きながら学費を稼ぎ学校へ通った話を聞いたりした。ラゾさんは、子供のことが大好きで、お年寄りにも優しいとても誠実な方であった。ラゾさんとの“ふれ合い”を通して、子ども達は《生》のブルキナファソの人々のくらしを体験していった。

写真8　2Km、バケツの水を運んで知った水汲みの大変さ。アフリカでは子ども達がこんな仕事をしてるんだ！！

写真9　初めてみたイスラムのお祈り。今までのイスラムのイメージが変わってきた！

① 人の思いに触れる・ラゾさんから聞いた人種差別や偏見の話

5年の時、コンゴ民主共和国のモフランさん（写真10）から、コンサートで人種差別や偏見の体験を聞いたり、夏休みの調べ学習でキング牧師やアパルトヘイトについて調べていたことから、ラゾさんから差別や偏見のことを是非聞きたいと問題意識を持っていた子もいた。Sさんもそんな子の一人であった。Sさんは、お父さんが台湾の方で、親子関係がうまくいかず、Sという自分の名前（台湾名）に嫌悪感を抱き悩みながら、差別問題への意識をずっと持ち続けてきた。そして、ラゾさんが帰ってしまう最後の昼休みに、友達と一緒に、思い切って「ラゾさんは差別されたことがありますか？！」と聞いた。そして、その体験を元に劇の脚本を作り、プレゼンテーションのひとつとして発表していった（資料6）。

写真10　心に残ったモフランさん（中央）のJAMBOコンサート

資料6

脚本・道徳教材「ラゾさんに聞いた差別のこと」

（ナレーター）私達は、ラゾさんに差別のことを聞こうと思いました。けれども、なかなか切り出せず、最後の日になってやっと聞くことができました。

（子A）「ラゾさんに、私達の歌を聴いてもらおうよ。」

（子B）「うん。ラゾさーん！」

※呼ばれたラゾさんが行こうとする時、二人の女の子がラゾさんに話しかける

（子C）「ラゾさん、質問してもいいですか？」

（ラゾ）「いいですよ。」

※三人は座って話し始める

（子C）「ラゾさん。差別されたことはありますか？！」

（ラゾ）「えっ？差別？！」

（子D）「うん。差別。」

（ラゾ）「差別？難しいね・・・。」

（子C）「う～ん。ラゾさんは、肌黒い。私達、肌白い。」

（子D）「ラゾさん、ダメ。私達OK。って言われた事ありますか？」

（ラゾ）「ああ、あります。電車、座っても、横、誰も座らない。新幹線、座ったら、後ろの人、どこか行った。だから、電車でいつも立っている。みんな座れなくなるから。」

※ラゾさん、二人の手を握る

（子C）「悲しい？」

（ラゾ）「悲しい・・・。」

※ラゾさん、すぐに話を変える。

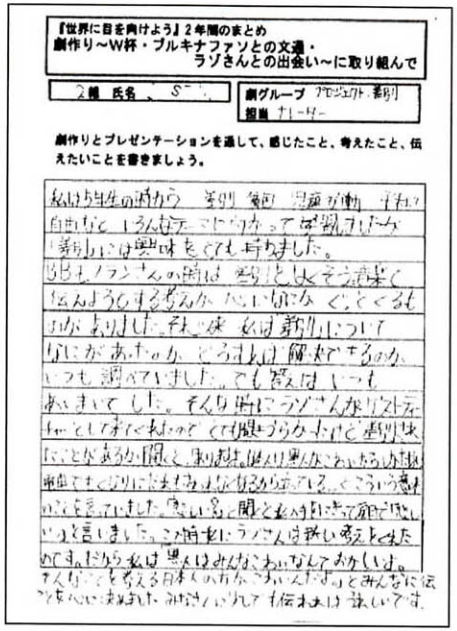
（ラゾ）「みんなの歌、聴かせてください。」

（ナレーター）ラゾさんは、やはり差別のことがつらかったらしく、すぐに話題を変えてしまいました。もっと聞きたかったことはたくさんありましたが、ラゾさんの悲しい目は忘れられません。『悲しい・・・』。日本語が難しくてその一言でしたが、あの複雑な思いは、きっと耐えられないものだったと思います。

このプレゼンテーションは、地域公開の日曜参観で、保護者の方をはじめ地域の方々、他学年の子ども達にこれまでの学習を通して伝えたかったことをまとめたものであった。

②「道徳」の授業から（表現活動を通して見えてきたラゾさんの悲しみ）

資料7のノートを見ると、それまで、差別について「答えはいつもあいまいでした」と捉えていたSさんが、ラゾさんとの出会いや劇作りを通して、「『黒人はみんなこわいなんておかしいよ。そんなことを考える日本人のほうがこわいんだよ。』とみんなに伝えることを心に決めました。」と変容していった様子が伺える。そこには、劇作りで、脚本を考えたり、演じていく中で、自分の心の中に感じていた悲しみや疑問を、もう一度深く問い直すSさんの姿があった。



『世界に目を向けよう』2年間のまとめ
劇作り～W杯・ブルキナファソとの交流・ラゾさんとの出会い～に取り組んで

2組　氏名　S

劇グループ　プロジェクト・差別
担当　ナレーター

劇作りとプレゼンテーションを通して、感じたこと、考えたこと、伝えたいことを書きましょう。

私は5年生の時から　差別　問題が動　それは自由なことをしゃべってはいけないんだ　差別は人には興味をくれる与えました。
思ったラゾさんの話は　差別とはそうゆうものと伝えようとする気がたいせつなことをくれるものがありました。それで　私は差別について　なにがあったのか　どうすれば解決できるのかいつも調べていました。でも答えはいつもあいまいでした。そんな時にラゾさんがリクエストしてくれたので　とても嬉しかったと差別されたことがあるか聞くと　答えました。黒人は黒人でおいらは地球人だと答えました。みんなが見るから笑っている。こういう意味のことを言っていました。「悲しい？」と聞くと悲しいと言いました。この時に　ラゾさんは　悲しい　考えをもためてる。だから　私は　黒人はみんなこわいなんておかしい。
「そんなことを考える日本人のほうがこわいんだよ。」とみんなに伝えることを心に決めました。みなさんの中で　伝えれば　良いでは

資料7　劇作りに取り組んだSさんのノート

プレゼンテーションを終えた後、道徳の授業『みんなで考えよう。ラゾさんの思いを』で、この劇の脚本を元に話し合うことにした。子ども達は、ラゾさんとの4日間のふれ合いや劇作りを通して、ラゾさんの体験した差別や偏見のことについて真剣に考えていった。特にSさんは、電車の座席のことだけでなく、「自宅の隣や近所の人に挨拶をしても誰も返事をしてくれない事」などのラゾさんの話をしながら、涙を流し「何で、そんな事が起こるんやろう・・・？！それも日本で・・・。」と言葉をつまらせていた。そして、Sさんの発言を聞いていた周りの子ども達も、参観していた保護者や地域の方々も言葉を失い、改めてラゾさんの受けている差別や偏見の意味をかみしめていた。子ども達にとって、明るくて優しくて大好きだったラゾさんの裏側に隠された悲しみ。それは、5年生の時モフランさんが教えてくれた「人は見た目で判断してはいけない」「〈憎しみ〉からは〈憎しみ〉しか生まれない」というメッセージに「すごく心に残った」と感動していた子ども達が初めて直面した《理想》と《現実》の大きな“ギャップ”であった。

(5)プレゼンテーション作りを通して

ラゾさんから聞いた差別の話以外にも、子ども達は二年間の学習を振り返り、自分の伝えたいことやメッセージについて考えていった。そして、9つのグループに分かれ、自分達で脚本を書き、演出を行い、練り上げていく活動を通して、子ども達は、「自分」という存在を見つめながらプレゼンテーションを作り上げていった（資料8、写真11～15）。

資料8　『世界に目を向けよう』のプレゼンテーション

①W杯の“光”と“陰”（貧困・人種差別・児童労働）
②モフランさん（コンゴ民主共和国）との出会い
③ブルキナファソとの文通が始まった（生活の厳しさ、文化の違い、ビデオレター）
④ボンヌの劇（大家族制⇔児童労働）
⑤ボンヌについての話し合い
⑥ラゾさんとの水くみ体験（生活に欠かせない大変な仕事）
⑦ラゾさんの通っていた小学校の話（厳しい環境でも、必死に勉強する子ども達）
⑧ラゾさんと作ったブルキナファソ料理（ありのままの味、文化の違い）
⑨ラゾさんに聞いた“差別・偏見”のこと
⑩創作曲『ＨＩＫＡＲＩの道へ』

写真11　④ボンヌの劇。世界では子ども達がこんな目にあっている。自分達が演じて初めてわかったその辛さ。

写真12　⑨「悲しい・・・」の一言に込められたラゾさんの“差別・偏見”の話。「なぜ？どうして！？」これからもずっと考えていきたい。

写真13　⑦厳しい学校。ノートや鉛筆もない中勉強する子ども達。学校に行けることの幸せを考えた。

写真14　⑥水汲みは大変な仕事。ブルキナでは6才の子どもからやっている。日本では水を無駄使いしているなあ。

写真15　⑤ボンヌについての話し合い。大家族制？、児童労働？話し合うほど問題の難しさが見えてきた。

プレゼンテーション後にHさんは資料9のように書いている。「劇全体に共通する伝えたいことは“平和”なんじゃないかな」「私達が差別を無くしていく、未来を変える人なのかもしれない・・・。」と。

Hさんと同じように、他の子ども達も、9つの劇をつなげ、一つにまとめたプレゼンテーション『世界に目を向けよう』を作り上げたことによって、今までの自分達の二年間の総合的な学習の“意味”や“価値”を改めてかみしめていた。プレゼンテーションという創作活動がこれまでの子ども達の学習のまとめとして大きな力となった。 そして、6年間の《最後の授業》として、卒業式でも行うことにした。

資料9　プレゼンテーションを終えてのHさんのノート（抜粋）

私は5．6年生の間に総合的な学習でたくさんのことを学んできました。どれも楽しかったことばかりでした。時には涙が出そうな時もあったけど、色々なことがわかり、世界がどうなっているのかなどもわかり、うれしかったです。プレゼンテーションの劇は心配と不安がたくさんでした。けれど、みんなの劇を見ていると、忘れていた思い出などがたくさん出てきました。そして、劇全体に共通する伝えたいことは“平和”なんじゃないかなとも思いました。この2年間で学んだことを生かし、未来を明るくしていければとてもうれしいです。私達が差別などを無くしていく、未来を変える人なのかもしれない・・・。

4．学習の足跡（資料10）

二年間の学習は総て事前にカリキュラムを構想できた訳ではない。その時々の子どもの様子や興味・関心に基づいて、アンテナを張り巡らし、たくさんの情報を収集し、たくさんの人に出会いながら、学習は進んでいった。特に海外との交流での“時間の流れ”は、日本人の「計画」「予定」するようにはいかない。その流れに身を任すことの必要性も、4年間の国際理解教育で学んだ事の一つである。学習のめあてでも述べたが、自国の物差しや価値観を基準にして考えるのではなく、それぞれの国の習慣や価値観を尊重しながら“共生”“共存”することの大切さを強く感じた。

資料10　２年間の総合的な学習・国際理解教育の流れ（全１７８ｈ）

〈５年生・１学期〉

『W杯から世界に目を向けよう』（２５ｈ）
①出場国に目を向けよう
○出場国について調べたことをもとに、林間学舎でクイズ大会を開こう！ クイズ作り
○調べた国のことについて、発表・交流をしよう 調べ学習 発表（プレゼン） 話し合い
②W杯の新聞記事に目を向けよう
○W杯から見える厳しい現実の“影”の部分に目を向けよう。 話し合い
③「貧困」「人種差別」「戦争・紛争」をテーマに、調べ学習に取り組み発表しよう
○自分の調べたいテーマをもとに、グループを組み発表しよう 調べ学習 発表 話し合い
※水不足問題・アパルトヘイト・戦争・アウシュビッツ・地雷・テロ等

〈５年生・２学期〉

『西アフリカの太鼓・ジェンベから感じようアフリカンマインド』（５ｈ）
モフランさん（コンゴ民主共和国のパーカッション奏者）との出会い 人との出会い
○「人種差別」「平和」についてのメッセージを伝えるモフランさん
○コンサートと交流会を通して、３つのテーマについて考えてみよう。
○モフランさんに夏休みに調べたテーマについて、質問しよう
○モフランさんの話を聞いて、３つのテーマについて考えたことを話し合おう 話し合い

『ブルキナファソとの文通・交流から世界に目を向けよう』（１８ｈ）
①ナバワクセ小学校との文通しよう
○くらしのちがいについて発見しよう 人（文通）との出会い
②岡野さんとの出会い・メール・写真
○岡野さんからの写真とビデオから、「働く子どもたち」について考えよう（水くみ・物売り・手伝い等） 感じたこと 話し合い

『ジェンベから感じようアフリカンマインド』（１２ｈ）
○ジェンベの合奏で演奏会に挑戦しよう 表現活動

〈５年生・３学期〉

『ブルキナファソとの文通・交流から世界に目を向けよう』（８ｈ）
① 岡野さんからのメール
○ブルキナファソとのくらしや文化のちがい 話し合い
○水汲み・働く子どもたちについて
○ビデオレターを送ろう プレゼン作り

『ジェンベから感じようアフリカンマインド』（１０ｈ）
○ブルキナファソを学習してきて、一番心に残ったことをジェンベの音楽で表現しよう 創作・表現
『図工共同制作・ブルキナファソ・ジェンベ・子どもたち』（１２ｈ）
○岡野さんからの写真をもとに、絵画による共同制作で表現しよう 表現

〈６年生・１学期〉

『世界に目を向けよう』－ブルキナファソとの交流・文通を通して－（２３ｈ）
○岡野さんとの交流 人との出会い
○ナバワクセ小学校からのビデオレター・ボンヌの劇から考えよう 貧困の問題 話し合い
○人にとって本当に大切なことって何やろう！？

〈６年生・２学期と３学期〉

『世界に目を向けよう』―ラゾさんとの出会い―（２５ｈ） 人との出会い
○ラゾさんから教えてもらったブルキナファソの人々のくらし
○水汲み体験　毎日の生活に欠かせない大変な労働だが、それは子ども達の仕事
○厳しい環境でも負けずに勉強する子ども達
○楽しかった料理作り　ありのままの味を教えてくれたラゾさんの誠実さ
○ラゾさんに聞いた日本での悲しい出来事　差別・偏見の問題

『世界に目を向けよう』２年間のまとめのプレゼンテーション作り（４０ｈ） 表現 話し合い プレゼン
○２年間の学習を通して、感じたこと、考えたこと、そして伝えたいことをもとに、まとめのプレゼンテーションを作ろう（劇作り・演奏・踊り・ナレーターの言葉を通して、自分の思いを表現しよう）
○それぞれの劇をみて、伝わってきたことについて話し合おう
○自分たちで“世界で一つ”の卒業式を作ろう。

5. 実践から学んだもの（感性・思考・表現の“一体化”）

子どもが「思考する」という事は、子どもが成長するためには不可欠な事である。だが、その思考の元には、子どもの「心が動く」という事が前提となってくる。心が動かないところからは、《思考》や「こうなりたい」「こうしたい」という意欲・願いも生まれてこない。そういった意味で、子どもの心を動かす《感性》を育てることが重要となってくる。

“頭”だけで思考し、判断する子どもの「生きる力」は強いとは言えない。例えば、今回のラゾさんの人柄や生き方、行動力をみると、そこには「力強さ」がある。「たくましさ」がある。そして、それと同時に人間としての「やさしさ」があった。

子どもの《思考》を深め、《感性》を育てるには、様々な表現活動が有効であると強く感じる。

今回のジェンベ演奏やダンス、共同制作、プレゼンテーション作りでも、子ども達は“五感”を通し、考え、悩み、イメージをふくらませながら、創作・表現していく。そして、その創作や表現活動を通しながら、また考えていく。その様子を見ていると、子どもにとっては、思考と表現とは一体のものであり、「思考＝表現（体現）」、「表現（体現）＝思考」であることを強く感じる。

ブルキナファソとの交流の中でも、ナバワクセ小学校からの手紙やビデオ、岡野さんからのメールや写真、ラゾさんとのふれ合いは、「驚き」「感動」の連続であった。そして、《表現活動》を通しながら、「働いている子を応援したい。」「自分もがんばろうという気持ちになる。」「トイレのちがいにはびっくりしたけど、ちがいがあってもいいと思うな。」等、相手のよさを自分の中で認める《感性》を伴い《思考》を深めていた。《思考》と《表現》とはスパイラルのように密接に絡み合っている。そして、それらの二つの活動を通して、子どもの中の《感性》が研ぎ澄まされてくる。

総合的な学習や国際理解教育を進めていく上で、《感性》《思考》《表現》を“一体”のものと捉え、「感動」「感激」「喜び」など、子どもの心をゆさぶり、心を動かし、子どもの心に残るものがどれだけあるのかということが大切になってくるということを強く感じる。

6. おわりに

様々な情報があふれている現在、私達（子どもも大人も含めて）は、すぐ「わかったつもり」「知ったつもり」になりがちである。しかし、世界には、まだまだ私達に届いてない情報がたくさんある。教室の中だけで勉強し、考える時代ではない。“デジタル”だけではなく、“アナログ”の「情報」を大切にする事の大事さをたくさんのゲストティーチャーの方との出会いから強く感じた。これから、子ども達は世界へと大きく羽ばたいていく。そんな子ども達がこの学習で少しでも世界に目を開き、本当の“グローバルな感覚”を持った人間に成長してくれることを心から願っている。そして、これからも感性・思考・表現を大切にした学習を進めていきたいと思っている。

2年間の総合的な学習・国際理解教育の流れ（全１７８ｈ）

〈５年生・１学期〉

『W杯から世界に目を向けよう』（２５ｈ）
①出場国に目を向けよう
○出場国について調べたことをもとに、林間学舎でクイズ大会を開こう！ クイズ作り
○調べた国のことについて、発表・交流をしよう 調べ学習 発表（プレゼン） 話し合い
②W杯の新聞記事に目を向けよう
○W杯から見える厳しい現実の“影”の部分に目を向けよう。 話し合い
③「貧困」「人種差別」「戦争・紛争」をテーマに、調べ学習に取り組み発表しよう
○自分の調べたいテーマをもとに、グループを組み発表しよう 調べ学習 発表 話し合い
※水不足問題・アパルトヘイト・戦争・アウシュビッツ・地雷・テロ等

〈５年生・２学期〉

『西アフリカの太鼓・ジェンベから感じようアフリカンマインド』（５ｈ）
モフランさん（コンゴ民主共和国のパーカッション奏者）との出会い 人との出会い
○「人種差別」「平和」についてのメッセージを伝えるモフランさん
○コンサートと交流会を通して、３つのテーマについて考えてみよう。
○モフランさんに夏休みに調べたテーマについて、質問しよう
○モフランさんの話を聞いて、３つのテーマについて考えたことを話し合おう 話し合い

『ブルキナファソとの文通・交流から世界に目を向けよう』（１８ｈ）
①ナバワクセ小学校と文通しよう
○くらしのちがいについて発見しよう 人（文通）との出会い
②岡野さんとの出会い・メール・写真
○岡野さんからの写真とビデオから、「働く子どもたち」について考えよう(水くみ・物売り・手伝い等) 感じたこと 話し合い

『ジェンベから感じようアフリカンマインド』（１２ｈ）
○ジェンベの合奏で演奏会に挑戦しよう 表現活動

〈５年生・３学期〉

『ブルキナファソとの文通・交流から世界に目を向けよう』（８ｈ）
① 岡野さんからのメール
○ブルキナファソとのくらしや文化のちがい 話し合い
○水汲み・働く子どもたちについて
○ビデオレターを送ろう プレゼン作り

『ジェンベから感じようアフリカンマインド』（１０ｈ）
○ブルキナファソを学習してきて、一番心に残ったことをジェンベの音楽で表現しよう 創作・表現
『図工共同制作・ブルキナファソ・ジェンベ・子どもたち』（１２ｈ）
○岡野さんからの写真をもとに、絵画による共同制作で表現しよう 表現

〈６年生・１学期〉

『世界に目を向けよう』－ブルキナファソとの交流・文通を通して－（２３）
○岡野さんとの交流 人との出会い
○ナバワクセ小学校からのビデオレター・ボンヌの劇から考えよう 貧困の問題 話し合い

〈６年生・２学期と３学期〉

『世界に目を向けよう』－ラゾさんとの出会い－（２５ｈ） 人との出会い
○ラゾさんから教えてもらったブルキナファソの人々のくらし
○水汲み体験 毎日の生活に欠かせない大変な労働だが、それは子ども達の仕事
○厳しい環境でも負けずに勉強する子ども達
○楽しかった料理作り ありのままの味を教えてくれたラゾさんの誠実さ
○ラゾさんに聞いた日本での悲しい出来事 差別・偏見の問題

『世界に目を向けよう』２年間のまとめのプレゼンテーション作り（４０ｈ） 表現 話し合い プレゼン
○２年間の学習を通して、感じたこと、考えたこと、そして伝えたいことをもとに、まとめのプレゼンテーションを作ろう（劇作り・演奏・踊り・ナレーターの言葉を通して、自分の思いを表現しよう）
○それぞれの劇をみて、伝わってきたことについて話し合おう
○自分たちで“世界で一つ”の卒業式を作ろう。